

愛は意志、愛は工夫

(ヘブル一・一、二a、一ヨハネ四・一六)

四年連続の紅白出場が露と消え、悲しみにくれていた彼女のそばでスタイリストが言った。「これは神様がくれた私たちの意識が変わるチャンスなのかも」その言葉に励まされ、翌日にはすっかり立ち直った彼女。そんな彼女の今年のクリスマスの予定は「友達と教会とか行きたい」「ママ」なのだそう。何でも二年くらい前に教会に行き讚美歌を聞いたのが楽しかったからというのがその理由。ご存じ原宿のアイコン「ぎやろらいんちやろんぶろつぷぎやろーぱみゅぱみゅ(略:KPP)」さんである。

この例を見てもわかるようにクリスマスは普段は教会とは関係ない方々にもその存在が身近になる季節である。また教会は決して「一見さんお断り」的な団体ではないから、興味を持って下さるのは大歓迎である。今朝の礼拝でキリスト教の全てを話すことは到底出来ないが、今日はよく「愛の宗教」と紹介されているキリスト教の教える神の愛について二つのことを考えてみたい。

一、意志的な「愛」

「『愛』という漢字を用いて熟語を作れ」と言われたらまず思い浮かべるのは「恋愛」とか「愛情」と言ったものだと思う。勿論愛を用いた熟語には「愛惜」や「割愛」などもあるが、それを先に出す人は少数派であろう。さて「恋愛」や「愛情」は確かに「愛」であるが、それはより感情的なベクトルをもっている。勿論それは悪いことではない。現に聖書にも「主(神)があなたを恋慕して、あなたがたを選ばれた(申七・七)」なる記述もあるくらいだ。神の愛は感情的なのだ。だが人間の感情というものは多くの場合持続しないものだ。それは三組に一組が離婚するという我が国の現状をみても明らかである。

しかし神の愛はそうではない。神の愛は気分次第で増減するような移り気な感情では決してない。むしろそれは豊かな感情であると同時に持続的な意志である。それは先に読んだ聖書の個所からも確かめられる。そこには神が昔も今もかわらずに人間に対して語られていることが示されている。しかし神はなぜ人に語り続けるのだろうか？簡単である。それは私たちに関心を持っておられるからだ。よく愛の反対は無関心だという。だとすれば人に対して関心を持ち語りかけを続ける神の姿に愛を見るのは全くもって正しいのである。

二、工夫する「愛」

この個所から解ることがもう一つある。それは神が工夫を凝らしてご自身のこと人間に知らせようとしていることである。この「工夫」に愛を見ることはさほど難しいことではないと思う。

児童養護施設「あいの実」の第二代院長、関根ヒメ先生は「工夫」の人だったようである。食育なることが流行る遙か前から「食べる」ことに着目し、『食』は仕事の半分よ」と常々言っていた彼女は子どもたちに常においしいものを食べさせるために時代を先取りした調理器具を買ってみたり、まだベークライトやアルマイトの食器が主流で、自分の食器がないというのが普通の時代に、子どもたちそれぞれに瀬戸物の食器を用意したりされたという。そうした「工夫」と「労苦」に人は愛を見るものである。

人間のあらゆる愛の源泉である神の愛には同じ工夫がある。旧約時代には律法の付与や預言者のメッセージを通して折々にご自身の愛の意志を示された神は、ついにその究極として、ご自身のひとり子、即ちかけがえのない存在であるイエス・キリストを遣わし、そのみ子が十字架で死ぬことによつて、私たちのあらゆる罪の問題を解決された。これは神の側の愛の「工夫」によつてなされた業なのである。

* * *

川越線の車内である広告を見た。ミッドセンチュリー調の洒落た椅子に座り、落札した映写機を愛でる「ヤフオク歴2年」の某俳優の姿を、だ。思わず「何を言うか。こちらヤフオク歴一六年だぞ」と呟いた。しかし一六年も飽きずにやっているとなると実に色々なことに出くわす。その中で特に思わされるのが「写真」と「実物」の間にある差異だ。出品者は写真で情報を伝え、落札者はその情報をもとに入札額を決めるのだが、写真はあくまで写真に過ぎない。真を写しているとはとても言えないのだ。実際五百を超える私の取引を考えても写真と実物とが「びつたり」ということはついぞなかった。そう考えると神がみ子イエス・キリストを、即ち神が神ご自身をこの世界に遣わしたことはやはり瞠目に値する。なぜならイエスは人となられた神であり、この方を見ることによつて人は正しく神の愛を見ることが出来るからである。クリスマスは愛の季節。そこには男女の、家族の、友人の、或いはサンタ(！)など、あらゆる愛があるだろう。しかしぜひ覚えてほしい。その愛の根源は強い意志と工夫によつて、イエスによつて表された神の愛である。この愛を今日、知ってほしい。メリークリスマス！